

英語の発音指導における日本語の役割

— 軟口蓋破裂音と軟口蓋鼻音の区別を例に考察する —

三 沢 美智子
レパヴァー マリ

0. はじめに

「長野県」は、[naganoken] だろうか、それとも [naɒano ken] だろうか。筆者も少々混乱してくるが、本稿では、日本人が英語を学習する際に誤りやすい様々な音の中から、特にこれら有声軟口蓋破裂音の [g] と有声軟口蓋鼻音（いわゆる鼻濁音）の [ŋ] との区別をとりあげて、発音指導を効率よく行うためには、母国語である日本語に着目し、参考にしてゆく必要性を強調した。

1. 問題提起

現在日本において、学生が英語を学ぶ期間は中学校の3年間と高校の3年間を合わせた6年が最も一般的である。さらに、大学において英語科に進む者や、今はやりの英会話学校に通う者はそれ以上の期間を英語学習に費やしている。

石の上にも三年という諺があるように、3年以上勉強すれば大抵の科目はマスターできる。英語にしても、高校を卒業する頃には、相当程度の実力が身に付いているとされている。一般に難しいとされている英検の2級が、高卒程度の実力で合格できることを予定されていることから、それはいえよう。

その一方で、日本人の英語力の低さが問題とされている。国際化が叫ばれる

現代において、英語を話せるということが国際人の最低条件といわれるが、日本人の多くは、英語を話せないと自他共に認めている。高校までに一応習得したはずの英語を使えないというのである。一方で英語力がついたという評価をしておきながら、他方で英語力の無さを悲観する、というのが日本人の英語観ということになる。そこで気付くことは、積極的な評価を与えられるときにいう英語力と、消極的に評価される英語力とは、意味するところが異なるということである。英語は言葉であり、それには文法と会話という一般に言われるところの二つの領域がある。そして前者の英語力は文法に関するものであり、後者は会話についてである。ということは、一般の学生が英語を勉強しても、文法的な力をつくが会話力はほとんどつかないことになる。ネイティブ・スピーカーを講師にした英会話学校が大はやりするのも、なるほど頷ける話である。

このような現状は、英語教育の過程においてなにか問題があるとは言えないだろうか。

そこで、英語の発音指導に絞って、軟口蓋破裂音と軟口蓋鼻音を例に考察してみる

2. 発音指導の面から

2. 1. 日本人学習者の誤りやすいとされている音

日本人の発音する英語には、リズムやイントネーションの面から様々な研究がされているが、単音の発音に限って言うならば、[l]と[r]、[t]と[d]、[b]と[v]、[s]と[θ]などが最も混同しやすい音であると一般に言われている。これらの音にさらに付け加え、本稿で問題にしたいのは、軟口蓋破裂音[g]と軟口蓋鼻音[ŋ]の使い分けが学習者によってうまく習得されていないということである。これらの音は、本校学生を被験者に、Grate (1974) の発音診断テストを利用して行った実験の結果（他の音のデータは、資料3を参照のこと。）最もエラーが大きかったことからここで取り

上げることになったものである。

2. 2. 実験その1

目的：英語の発音学習において、学習者がどの程度軟口蓋破裂音と軟口蓋鼻音を混同させて発音しているかを調査する。

方法：発音法を一通り学習し終えた本校学生45名に、発音診断用の文章を読んでもらい、それを録音する。なお、診断用文章は、Clifford & Robinett (1986) から抜粋したものを利用した。studying, clothing, language, begins; long, feelingという、[g]および[n]の音を含む単語が点在している文である。(実験文については資料1を参照のこと。)

結果：全体の平均70.37%、標準偏差は1.126。単語別の得点は以下の通りである。

| | 正 | 誤 |
|---------------|--------|--------|
| [n] studying | 62.22% | 37.78% |
| [n] clothing | 82.22% | 17.78% |
| [n] long | 64.44% | 35.56% |
| [n] feeling | 71.11% | 28.89% |
| [ng] language | 53.33% | 46.67% |
| [g] begins | 88.89% | 11.11% |

この結果を見る限りでは、鼻音は正しく鼻音として発音している者が多いが、破裂音を鼻音と混同させて発音しているものが約半数いるということが分かった。今回は単語数が6個と限られているが、数を増やしてみれば、2音の使用に関する混乱の度合がより顕著に現れると思われる。

2. 3. 混同がおこる要因

このような、[g]と[n]の混同はいかなる要因によるものなのか。2つの理由を挙げる。

先ず、一つの理由として、学習者の母国語でその音が使用されているか否かによって、学習者の音に対する態度が違ってくることが挙げられる。(竹蓋・1992) 言い換えると、例えば[f]や[θ]など、あきらかに日本語にはない音に対しては、学習者の注意が向き、態度が敏感になるのに対して、母国語である日本語において同音素内の異音にしか過ぎないような音に対しては、比較的鈍感になるということだ。この場合、[g]も[n]も日本語で使用されている音である。

このことに関連して、第二に、英語と日本語を比較した場合、英語においては/g/と/n/は異なる音素であるのに対し日本語において[n]は/g/の異音でしかないことがあげられる。英語において[n]はもともと/n/の異音であったのが、[ng]という音の連続から/g/がきえて、/n/はひとつの音素になった。そこでsing VS sin ([siŋ] VS [sin])の対立が起こるわけである。(Gimson・1980) これに対して日本語においては、[n]([ガ])の音は、[g]([ガ])と同音素であり、次のような場合に現れるとされている。

ガ行子音の前の「ン」・・・銀色 [giŋilo]

元旦 [gantaŋ]

非語頭におけるのガ行・・・小川 [oŋawa]

右側 [miŋiŋawa]

そしてこれらのうち、[g]の音と混同して使われている音は、後者の非語頭における鼻音化したガ行音(鼻濁音)である。この鼻濁音は、共通語では普通ガ行の濁音とは区別されていることになっている。例えば「学校」の「ガ」と、「私が」の「が」とは違う音であるべきだとされている。(松坂・1989) もし、これらの音がきちんと日本語において区別されているのならば、仮に同音素で

あるとしても現在のような混同は起こらない筈である。指導の際に、日本語における「が」と「が²」の使い分けと、英語における使い分けの違いを指摘すれば済むことだからだ。

しかしながら、日本語におけるこの濁音と鼻濁音の使い分け自体があいまいになってきているという事実がある。実際これまでも、方言差や文字の影響により必ずしも非語頭のガ行濁音は鼻音化しない場合もあると言われてきているが、最近、特に若者の間で、この鼻濁音は減少の傾向が顕著に現れているという。(松坂・1989、城生・1989) もし日本語においてもこの鼻濁音 [ŋ] と濁音 [g] の区別の仕方に著しい個人差があるとしたら、また、そのような区別の仕方に単純な規則性がなければ、英語の発音指導におけるこれらの音の使い分けを再検討する必要がでてくるだろう。また、このことは、例えば [s] と [ʃ] などの他の音の使い分けにも言えることである。その理由を次の項目で説明する。

2. 4. 学習者のもつ母国語の言語体系の重要性

外国語を学習する際の母国語の影響については、多くの議論がなされているところではあるが、第一言語習得と外国語の学習の最も大きな違いは、学習者が既に一つの言語を習得しているか否か、という点であることを考慮に入れば、外国語学習において、学習者が母国語の様々な面を目標言語（本稿の場合は英語）に轉移しながら学習を進めていると考えるのは自然であると思われる。当然、母国語と目標言語が共通である部分に関しては学習の助けになるであろうし、異なるところにおいては、それは学習の障害になる場合が多い。例えば、冠詞の使い方やw h移動を含む文の作り方などは日本人学習者の最も不得意であるものだが、それはまさしく、このことに当てはまる例といえよう。

ここで重要なのは、学習者の出発点があくまで母国語を元にした言語体系（中間言語）である (Selinker・1992、Shimaoka・1993) ということだ。学習者がこの中間言語を出発点に学習を進めてゆくなれば、そしてそれが発音の習

得にも当てはまるとすれば、我々はもう一度学習者における音素体系を正確に把握しておく必要があることは必然的といえよう。

そこで、有声軟口蓋破裂音 [g] (濁音「ガ」と有声軟口蓋鼻音 [ŋ]) (鼻濁音「ガ」) の区別は日本語においてどの程度個人差があるかを調べるために、次のような実験を行った。

2. 5. 実験その2

目的：日本語において、濁音「ガ」と鼻濁音「ガ」がどの程度使い分けられているかを調査する。

方法：本学生45名に、「ガ」の音を8つ含む日本文を読んでもらい、録音する。(日本文は資料2を参照のこと。)

結果：鼻音化がきちんと行われた場合を1、行われなかった場合を0として採点した結果、全体の平均41.62%、標準偏差は2.71であった。個々の単語別の得点は、以下の通りである。

| | 鼻 | 濁 |
|----------------------|--------|--------|
| 「みぎ」 [miŋi] | 53.33% | 46.67% |
| 「まがる」 [maŋalu] | 66.67% | 33.33% |
| 「すぐ」 [suŋu] | 26.67% | 73.33% |
| 「ひだりがわ」 [hidaliŋawa] | 20.00% | 80.00% |
| 「おがわ」 [oŋawa] | 51.11% | 48.89% |
| 「が」 [ŋ] | 46.67% | 53.33% |
| 「ながれて」 [naŋalete] | 46.67% | 54.33% |
| 「いるのが」 [ilunona] | 66.67% | 33.33% |

考察：この実験から先ず言えることは、多くの音声学者に言われてるように、かなりの割合の学生が、一応鼻濁音を使用することになっている位置で濁音を使用しているということだ。それも、全ての場合に濁音を使

うというわけではなく、これら2音の使い分けはとてまあまいなものになっている。さらに、濁音を使用する度合いに関しての個人差は著しいといえる。このことから、学習者は日本語においても濁音と鼻濁音を混同させて使用している場合があるといえよう。日本語において音の混同があることを無視して、英語を学習する際にのみ「ここは [g] です。ここは [ŋ] です。」と言ったところで、学習者は「あれはどちらだったろう」と混乱するのも無理ない話である。

以上のことを踏まえて、次の章では音声指導に関して2つの提案をする。

3. 結論

3. 1. 提案その1

以上2つの実験から、英語における軟口蓋破裂音 [g] と軟口蓋鼻音 [ŋ] の混同の要因は、母国語である日本語での鼻濁音と濁音の混用と、それを無視した音声指導にあるということがいえる。どちらの音も、もともと学習者の母国語に存在しているものにもかかわらず、これを有効に利用していないのである。2. 4において、学習者のもつ母国語の言語体系の重要性についてはすでに述べているように、限られた授業時間の中でより効率良い指導をするためには、先ず、学習者がすでにもっている音素体系を出発点としたものを考えるべきである。当然、実験2からも明らかなように、共通の母国語であってもそれぞれ微妙に個人差があるだろうから、出発点は皆一定なのではなく、そのことを踏まえた上での指導が必要であると思われる。例えば、近似カナ表記システム (Shimaoka・1993) などを利用して、日本語で使用している音に対する意識を高めておいて、目標言語に近づいてゆくという方法などが挙げられる。

3. 2. 提案その2

日本人学習者が英語を学ぶ際、ネイティブ・スピーカーの発音を目標にするのは当然のことである。しかし、これが逆の立場で、英語話者が日本語を学習する際はどうかだろうか。彼らは、モデルとされている日本語の発音システムを学ぶだろう。しかし、実際我々が使用している日本語は、そのモデルとは必ずしも一致するものではないことは、今回の実験からも分かる。これと同様なことが英語にも言える。英語を母国語とする国は何も英国や合衆国に限ったことでなく、したがって、ネイティブ・スピーカーの発音を分析し、それを厳密に模倣させようとするのは意味がないと思われる。学習者に必要なのはむしろ、より母国語に近い、しかも英語話者に受け入れられ得るような発音のモデルの提示である。一つ具体的な例をあげるならば、アメリカン発音にしばしば聞かれるそり舌 [ə] などは、あいまい母音 [ɚ] で済ませることができし、そうすれば、熱心な学習者に聞かれる過度の巻き舌もなくなるだろう。もちろん本人の意思で好きな国の発音を模倣するのは結構だが、短い時間のなかで効率の良い指導を目指すのであれば、学習者の馴染みやすいモデルの提示は重要なのである。

3. 3. 今後の課題

今後は、日本語と各国で使用されている英語を比較して、発音指導用の標準的モデルを具体的に模索してゆきたい。

参考文献

- Cook, v. *Second Language Learning and Language Teaching*,
Edward Arnold Ltd, 1991.
- Gimson, A.C. *An Introduction to the Pronunciation of English*,
Edward Arnold, New York, 4th.ed., 1989.
- Grate, H.G. *English Pronunciation Exercises for Japanese Students*,

Regents Publishing Company, New York, 1974.

Le Pavoux, J.V. *A Standard English Pronunciation for Japanese Students*

学校法人大成学園、1991.

Prator, C.H.Jr. and Rocinett, B.W.

Manual of American English Pronunciation,

Holt, Rinehart and Winston, Inc, New York, 4th.ed.,

1985

Selinker, L. *Rediscovering Interlanguage,* Longman, New York,

1992.

石綿 敏雄、高田 誠 「対照言語学」(桜楓社)、1991.

竹蓋 幸生 「日本人英語の科学」(研究者)、1992.

島岡 丘 「英語音声学と中間言語」、「英語音声学と英語教育」(開隆堂)、

1994.

「中間言語の音声学」(小学英語教育研究会)、1993.

城生伯太郎 「音声学」(アポロン音楽工業株式会社)、1989.

松坂ヒロシ 「英語音声学入門」(研究者)、1989.

資料1 : 診断用の文章

When a student from another country comes to study in the United States, he has to find the answers to many questions, and he has many problems to think about. Where should he live? Would it be better if he looked for a private room off campus or if he stayed in a dormitory? Should he spend all of his time just studying? Shouldn't he try to take advantage of the many social and cultural activities which are offered? At first it is not easy for him to be casual in dress, informal in manner, and confident in speech. Little by little he learns what kind

of clothing is usually worn here to be casually dressed for classes. He also learns to choose the language and customs which are appropriate for informal situations. Finally he begin to feel sure of himself. But let me tell you, my friend, this long-awaited feeling doesn't develop suddenly – does it? All of this takes practice.

資料 2 : 日本語の文 : 右に曲がるとすぐ左側に小川が流れているのが見えた。

資料 3 : *Error-Frequency*

Consonants

| order | | % | order | | % | order | | % |
|-------|---------------------------------------|----|-------|----------------------------|----|-------|-------------------------------|----|
| 1 | [ŋ/ŋg]: medial | 97 | 20 | [h/f]: initial | 50 | 39 | [b/v]: initial | 32 |
| 2 | [ʒ/dʒ]: medial | 95 | 20 | [ð/z] | 50 | 39 | [hi/fi] | 32 |
| 3 | [wu] | 92 | 22 | [v/w]: initial | 47 | 39 | [ʃ/ʒ]: medial | 32 |
| 4 | [l/r]: clusters | 89 | 22 | [d/z]: initial | 47 | 39 | [d/dʒ]: initial | 32 |
| 5 | [w]: clusters | 82 | 24 | [ð/d] | 47 | 39 | [t/θ]: initial | 32 |
| 6 | [k]: final (unaspirated) | 74 | 25 | [l/r]: medial | 45 | 44 | [d]: final (unreleased) | 29 |
| 6 | [si/fi] | 74 | 25 | [ð/θ] | 45 | 44 | [t/d]: suffixes | 29 |
| 6 | [g/ŋ]: medial | 74 | 25 | [s/θ]: final | 45 | 46 | [l/r]: initial | 26 |
| 9 | Unreleased stops before consonants | 71 | 28 | [b/v]: final | 42 | 47 | [b]: final (unreleased) | 16 |
| 9 | [t/d]: flap | 71 | 28 | [hiy/fiy] | 42 | 47 | [n/m]: final | 16 |
| 9 | [hw/f]: initial | 71 | 28 | [ʃ/θ]: initial | 42 | 49 | [t/tʃ]: initial | 13 |
| 12 | [siy/fiy] | 66 | 28 | [g/ŋg]: medial | 42 | 49 | [s/z]: suffixes | 13 |
| 13 | [t]: final (unreleased) | 63 | 32 | [p]: final (unreleased) | 39 | 51 | [d/r]: unstressed prefixes | 11 |
| 13 | [w/hw]: initial | 63 | 32 | [f/v]: initial | 39 | 51 | [tʃ/dʒ]: final | 11 |
| 15 | [kit/kt]: final | 55 | 32 | [z/ʒ]: medial | 39 | 53 | [s/z]: final | 8 |
| 15 | [b/v]: medial | 55 | 32 | [n/ŋ]: final | 39 | 53 | [s]: final clusters | 8 |
| 17 | [g]: final (unreleased) | 53 | 36 | [s/θ]: initial | 37 | 55 | [tʃ/dʒ]: initial | 3 |
| 17 | [g/ŋ]: final | 53 | 37 | [l/r]: final | 34 | 55 | [iz]: suffix | 3 |
| 17 | flap/[r] | 53 | 37 | [f/v]: final | 34 | | | |